

弘前大学

学園だより

題字：佐藤 敬 学長



絵：「青」 制作：教育学部学校教育教員養成課程 畑林和貴

I 特集 施設紹介	
弘前大学資料館	2
II 弘前大学総合文化祭	12
III 言語力大賞コンテスト	14
IV 研究室紹介	
人文学部文化財論コース	19
V 海外だより	22
VI 新任教員紹介	24
VII けいじばんコーナー	24
VIII 編集後記	26

特集

施設紹介

弘前大学資料館

館長 長谷川 成一

1. 弘前大学資料館設置に至る経過



開館テープカット

本年（平成24年〈2012〉）10月26日、皆様待望の弘前大学資料館（以下、資料館と記す）が開館しました。それに先立って、10月1日、佐藤敬学長から、附属図書館長を務めている私が、初代の資料館長任命の辞令を受け取りました。

資料館の開館に至る経過を、簡単に説明します。平成22年4月、役員会ついで教育研究評議会において、前学長の遠藤正彦先生から資料館を設置するための準備委員会を発足したい旨の提案があり、承認されました。委員長には私が指名され、各部局から推薦された委員と委員長指名の委員なども合わせ、12名の委員をもって弘前大学資料館設置準備委員会が発足しました。同年6月、第1回委員会が開催されてから本年9月に至るまで、15回の委員会を開催し、資料館のテーマやコンセプト、資料館予定場所ゾーニングと出入り口の位置、開館時期、コンサルタントの選定、組織、規則等、展示内容、名称の検討、実習を伴う博物館教育への活用などを主に審議しました。こ

れらの議論を踏まえて作業を進め、このたびの資料館開館の運びとなりました。

資料館設置準備委員会では、第一に資料館のテーマとコンセプトを大いに議論しました。経過の詳細は省きますが、まずはテーマを「弘前大学 過去から未来へ」とすることに決めました。次に、それに基づいた館のコンセプトは、次のようにまとめました。

資料館は、弘前大学の前身校以来の歴史を多角的に紹介し、学生・教職員・OBの本学で培ったアイデンティティを確認する場とする。加えて、各部局の現況や研究状況を展示によって知らしめるとともに、それを踏まえて本学の新たな未来を展望する機能を持たせることを目指す。

テーマとコンセプトが決まりましたので、委員を通じて各部局などには、それに基づいた展示プランを作成の上、展示内容を組み立ててもらいました。



資料館正面の看板

館名については、次のように考えました。資料館は、本学の歩みと現況を展示することを基本としつつも、文系・理系を問わず最新の研究成果や収集した史資料・データを展示・紹介することを目指していること

から、館名は、博物館ではなく資料館としました。英語名では、Hirosaki University Museumとなっていますが、資料館を英訳するとarchiveとなり、文書館的な色彩が強くなって、誤解を生じる可能性を考慮して、英訳はmuseumとしました。加えて、英訳の館名を付けることは、留学生諸君にも資料館を大いに活用してもらおうという我々の意向を反映したものでした。



正面玄関

2. 資料館の役割と使命

資料館の役割と使命を、我々は次のように考えています。

皆さんご承知のように、昭和24年(1949)5月、前身校である官立弘前高等学校・青森県師範学校・青森医学専門学校を基盤として、新制弘前大学が開学しました。それから、すでに63年が経過しました。津軽地方のみならず青森県、北日本の地域にあって、弘前大学が高等教育機関として、大きな役割を果たしてきたことに異論を差し挟む人はいないでしょう。すでにして当該地域の歴史の一環を構成しているといっても過言ではありませんし、弘前大学の歴史を語ることは、弘前市の歴史、青森県の歴史を語ることの大事な一部を構成することでもあります。したがって弘前大学のエッセンスを凝縮した資料館は、今後、地域の社会教育を担う博物館施設としても、それらの機能をさらに充実・発展させてゆくことが使命・役割として期待されること

と思います。具体的には、市内・県内の各博物館などの社会教育施設や、他大学の大学博物館とのネットワークを通じて、資料館が多くの方々の知的なニーズに広く応える役割を果たすことが使命として期待されています。

ひるがえって本学に目を転じた場合、資料館の使命と役割はいかなるところに求められるでしょうか。

平成24年(2012)10月12日の朝日新聞朝刊に、「学んで欲しい母校のこと」と題する記事が掲載されました。それは、各地の大学で自分の大学の歴史や現状を教える「自校教育」が活発だとの記事でした。受験対策に追われて、入った大学のことをよく知らない、そんな学生に誇りを持って新たな目標への気持ちを高めてもらうねらいのことです。前述の資料館のテーマやコンセプトは、まさにこの「自校教育」の機能を体现することを目指したものであり、時宜にかなった施設として資料館は位置づけられ、かつその役割を期待されるのではないのでしょうか。その意味からも、本学の教職員・学生諸君には資料館に来館してもらって、「弘前大学の一員」としての意識を大いに育てていただきたいものです。

3. 資料館の概要と展示内容など

資料館は、本学教育学部南側1階の一部に位置し、入口は第一体育館側に面してい



展示室入口ゲート

I 特集 施設紹介



実習室



作業室

ます。館内は、大きく二つのスペースと機能を持っています。一つは展示室であり、その中には企画展示室（年に数回の展示を予定しています）を兼ね備えています。

もう一つは、博物館実習や実地研修・研究などの作業を行うことを想定した実習室と作業室です。展示室と実習室・作業室の二つを合わせると、560㎡の規模です。

展示室は、12のブース・コーナーで構成し、太宰治の自筆ノートをはじめとして、弘前大学の各部局で所蔵してきた貴重な資料や戦火を逃れ奇跡的に残った品、遺物、モニュメント、標本類、さらには最新の研究の成果などを中心に展示しています。

以下、各ブースとコーナーをご紹介します。

①「前身各校の歩み」コーナーでは、官立弘前高等学校や青森医学専門学校、青森県師範学校など、弘前大学開学以前の前身各校に関する資料を展示しています。展示品は、以下の通りです。

官立弘前高等学校において使用された時計、官立弘前高等学校校旗、青森医学専門学校校旗、官立弘前高等学校開校式祝辞



前身各校の歩みコーナー



官立弘前高等学校の大時計



青森医学専門学校校旗

1921年（大正10年）、青森県師範学校で編纂された『陸奥地誌略』、青森師範学校卒業式告辞 1945年（昭和20年）、官立弘前高等学校建造物完成の棟札 1924年（大正13年）、官立弘前高等学校の丸椅子

②「弘前大学の歴史」コーナーでは、弘前大学の歴史やキャンパスの移り変わり、歴代学長、国際交流の現況、太宰治自筆ノ



弘前大学の沿革年表

トをはじめとする附属図書館所蔵の貴重資料を紹介しています。展示品は、以下の通りです。

弘前大学の沿革、キャンパスの変遷、第一回評議会議事録 1949年（昭和24年）、弘前大学歴代学長、官立弘前高等学校以来の附属図書館モニュメント、弘前大学と国際交流、本学との海外提携大学からの記念品（テネシー大学マーチン校 アメリカ合衆国、大連理工大学 中華人民共和国、鄭州大学 中華人民共和国、哈爾濱師範大学 中華人民共和国、京畿大学校 大韓民国、慶北大学校 大韓民国、中国農業大学 中華人民共和国）



弘前大学歴代学長



国際交流コーナー

【弘前大学所蔵貴重資料】

太宰治自筆ノート 2冊「修身」、「英語」、「修身」ノート脱漏ページ、「英語」ノート裏表紙、山鹿素行書状写 喜多村源八宛 1679年（延宝7年）、坪内逍遙書簡 大塚甲山宛 1904年（明治37年）、弘前八幡宮社務日記 1784年（天明4年）



弘前大学所蔵貴重資料



太宰治自筆ノート（原本）

③「郷土資料と津軽学」コーナーでは、津軽領元禄国絵図写や民俗・考古の共同研究の成果、地域誌『津軽学』を展示しています。展示品は、以下の通りです。

津軽領元禄国絵図写、聖地と民俗－弘前市大沢一、昆沙門宮当山縁起、津軽学ポスター、『津軽学』創刊号～6号



「郷土資料と津軽学」コーナー

I 特集 施設紹介

④「環境と未来への研究」ブースでは、地域共同研究センター・白神自然環境研究所・北日本新エネルギー研究所の製品化された研究成果や様々な標本類をご覧いただけます。展示品は、以下の通りです。

【地域共同研究センター】

藍染ポロシャツ、フード・アクション・ニッポンアワード 受賞楯、プロテオグリカン入り商品、サケ模型、第9回産学官連携功労者表彰 賞状・受賞楯



地域共同研究センター

【白神自然環境研究所】

気象・地象の研究、生物多様性の把握、植物標本、昆虫標本、白神山地と人の暮らし、山の道具（ショイコほか4点）



白神自然環境研究所

【北日本新エネルギー研究センター】

新理論『ローテーションフロー型』、フラッシュウインド、小型軽量化移動機器搭載式燃料電池、環境と未来への研究紹介デジタルパネル



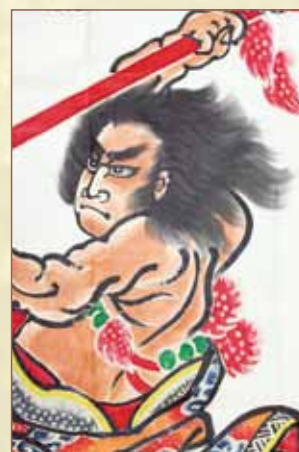
北日本新エネルギー研究センター

⑤「津軽の華 弘前大学とねぶた」コーナーでは、弘前大学制作の「弘前ねぶた」の紹介をしています。半世紀の歴史を持つ弘前大学ねぶたの歩みを3D映像でお楽しみ下さい。展示品は、以下の通りです。

過去の主な弘前大学ねぶた鏡絵、ねぶた絵 1982年（昭和57年）、3D映像「弘前大学ねぶたの歩み」



弘前大学ねぶた3D映像



ねぶた絵

⑥「先人の業績」ブースでは、学問・芸術の分野で世界的な業績をあげた弘前大学の教員と卒業生を紹介しています。展示品は、以下の通りです（敬称略）。

郡場 寛 著書

『植物の形態』、『植物生理生態』

高橋 信次 著書

『Rotation radiography』,

文化勲章受章記念物差し

松木 明知 著書

『Seishu Hanaoka and his medicine』,

『華岡青洲と「乳巖治験録」』ほか10冊

尾山 力 著書

『Endocrine response to anesthesia and intensive care』, 『Endo crinology in anaesthesia and surgery』ほか

古田 孝之 著書

『Invitation to linear operators』,

『線形作用素への誘い』

島 善鄰 著書

『実験リングの研究』,

『リング栽培の実際』ほか

武田 和義 日本育種学会賞メダル, 著書

『植物遺伝育種学』

正木 進三 著書

『Seasonal adaptations of insects』,

『生態進化発生学』ほか

佐藤 矩行 著書『ホヤの生物学』, 『発生と進化』

羽下 昌方 陶芸作品「創造の新天地へ」



「先人の業績」①



「先人の業績」②



「先人の業績」③

各部署の展示ブースでは、各部署の理念やコンセプトに基づき、その歴史と特色ある研究成果や所蔵品をとおして、部署の過去・現在・未来を知ることができる工夫を凝らした展示となっています。

⑦【人文学部】

人文学部では、「過去から現在までの有形・無形の知的資産の継承と、それらのより豊かな発展をめざします。」との理念やコンセプトに基づいて、次のような史資料の展示をしています。

イタリアルネサンスにおける象徴寓意図の世界、パナギューリシュテの遺宝（レプリカ）、ピエリオ・ヴァレリアーノ著『ヒエログリフ集』1626年、トゥルカナのサンダル占い、徳川家光御内書 津軽信義宛 寛永期（1629-1643）、江戸幕府老中奉書 津軽信義宛 寛永期（1629-1643）、中央アジア出土文献の歴史学研究、古代トルコ語の物質供出命令文書、中央アジア出土の漢文



人文学部①

I 特集 施設紹介

『増一阿含経』（断簡）、敦煌の石窟寺院（第61窟）の尼僧像、都市交通の研究、世界諸言語の言語特徴に関する地理的分布の研究、中国明代の交通の研究、インドゼミ研修旅行とガンジーの遺跡写真、いがめんち研究紹介、人文学部研究紹介デジタルパネル



人文学部②

⑧【教育学部】

教育学部では、「高い資質を持った教員ならびに教育的視点をもって地域で活躍できる人材として、『専門力』『実践力』を兼ね備えた教育プロフェッショナルの養成をめざします。」との理念やコンセプトに基づいて、次のような史資料の展示をしています。

ラボ・バスプロジェクト、暫定 師範地理 本科用巻一（第二綴）昭和21年発行、暫定 師範地理 本科用巻二（第二綴）昭和21年発行、暫定 中等地理三（中）昭和21年発行、『青森師範学校志』、『転換の時代の教師・学生たち—青森師範学校・弘前大学教育学部祝辞・答辞集』、「村上善男・芸術の軌跡」案内文・略歴、「イーハトーボ気象」



教育学部①



教育学部②

1975年、「鯨ヶ澤・帯緋衣漂着9」1991年、「鯨ヶ澤・帯緋衣漂着3」1989年、「イーハトーボ気象b」1975年、教育学部研究紹介デジタルパネル

⑨【大学院医学研究科】

大学院医学研究科では、「医学研究を牽引する人材と、豊かな人間性と高度で最新の医学知識をもって社会に貢献する医師を養成する。」との理念やコンセプトに基づいて、次のような史資料の展示をしています。

『ダ・ヴィンチ解剖手稿』、解体新書（写本）、化学天秤 2点、屈折計、比色計、電気炉、コンセントレーター、水銀気圧計、解剖学教育掛図、昭和41年解剖体慰霊祭、医学部20周年資料、卒業記念アルバム、昭和53年テネシー学長来校記念写真、医学部30周年資料、医学研究科研究紹介デジタルパネル



大学院医学研究科①



大学院医学研究科②

⑩【大学院保健学研究科】



大学院保健学研究科①



大学院保健学研究科②

大学院保健学研究科では、「保健学は、人々の健康について探求する学問である。基本理念は、教育と研究を通してその成果を社会に還元し、人類の健康と福祉の向上に寄与することである。」との理念やコンセプトに基づいて、次のような史資料の展示をしています。

徒手筋力検査法教本、作業療法で作製する装具、ナイトプリント、ナックルペン

ダー、角度計（ゴニオメーター）、卓上煮沸消毒器、酸素吸入用器具、洗眼瓶と洗眼受水器、京大式蒸気吸入器、回転陽極、化学天秤、ユニフォーム〈医学部保健学科看護学専攻 現在・教育学部特別教科（看護）教員養成課程時代・医療技術短期大学部看護学科時代〉、看板3種、骨学実習教本、頭蓋骨を下から見た図、幼児の乾燥交連骨格タペストリー、成人女性の交連骨格タペストリー、放射能防護服、福島原発事故における保健学研究科の取り組み、弘前大学における被爆医療人材プロジェクトの概要と地域連携、放射線って何だろう？、保健学研究科研究紹介デジタルパネル

⑪【大学院理工学研究科】



大学院理工学研究科①

大学院理工学研究科では、「世界に存在するあらゆるものに疑問を持ち、追及する心。あなたの心に生まれる『なぜ、どうして』が、新しい発見の入口です。」との理念やコンセプトに基づいて、次のような史資料の展示をしています。

岩石の観察方法、珍しい鉱物〈津軽鉱・水晶と黄鉄鉱・方鉛鉱・ルビー・岩塩・紅柱石・黄銅鉱〉、ブラックライトで光る鉱物〈燐灰ウラン石・ホタル石・灰重石〉、雪害観測所写真等、直示天秤、化石、ストロマトライト、流紋岩、二枚貝の化石、アンモナイト、三葉虫、琥珀、ウミガメの化石、コートラングライト、日本蝦夷地質要略之図（復刻版）、手回し計算機、地震計、コンクリートコア、

I 特集 施設紹介

SENSマシンのビット、融点測定装置、岩木山から採取した岩石、砂質シルト岩 ほか8点、岩木火山地質図および断面図、理工学研究科研究紹介デジタルパネル



大学院理工学研究科②

⑫【農学生命科学部】

農学生命科学部では、「教育・研究の理念として『生物・生命・資源・農業・環境』を柱とし、自然と人間の調和ある発展を図る為の教育と研究を行っております。」との理念やコンセプトに基づいて、次のような



農学生命科学部①



農学生命科学部②

史資料の展示をしています。

光学顕微鏡 6点、解剖顕微鏡、カメラ 2点、位相差顕微鏡装置 など、オオジロムササビ（雄）剥製、テン剥製、イタチ剥製など、マイクローム刃、回転式マイクローム、卓上型簡易マイクローム、パラフィン伸展器、電源装置、フォトオシロスコープ・ユニット、オシロスコープ、クロノメーター、マルキールマグネット、感応コイル など、「清水森ナンバ」ブランド確立研究会の構成・役割、リンゴ園の一年と弘前大学のリンゴ研究、青森リンゴの歴史、拡大して観よう、照井陸奥生教授の菌類標本、チャイロミ菌核病菌の子のう盤、リンゴ灰星病菌の子のう盤、ロタトリウム、キモグラフ、植物標本ほか、農学生命科学部研究紹介デジタルパネル

ここで、資料館の紹介を終えるに当たって一言御礼を申し上げたいと思います。10月26日の資料館のオープンにこぎ着けるまで、学内外の数多くの方々から篤いご協力や心のこもったご助言を沢山いただきました。ここに改めて感謝申し上げますとともに、資料館の発展に今後ともよりいっそうのご指導とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

*資料館の開館等に関する情報は、以下の通りです。

- ・開館時間 10:00-16:00（入館は15:30まで）
- ・休館日 土曜・日曜・祝日・盆期間・年末年始
- ・住所 〒036-8560 弘前市文京町1（弘前大学文京地区キャンパス内）
- ・TEL: 0172-39-3432 FAX:0172-39-3433
- ・E-mail: jm3432@cc.hirosaki-u.ac.jp



【トピックス】

本年（2012）11月16日（金）、東京芸術大学長の宮田亮平先生が、資料館を視察されました。熱心にご覧になり、展示や運営に関して多くのご指導を頂戴しました。衷心より感謝申し上げます。



第12回 弘前大学総合文化祭

今年の第12回弘前大学総合文化祭は10月26日から28日にかけて行われました。今年の総合文化祭は文句なしの快晴に始まり、最終日のちょっとした悪天候に悩まされながらも、無事に幕を下ろすことができました。この3日間の来場者数は、過去の来場者数を上回る約9,000人にもおよび、総合文化祭の成長や広まりといったものを感じております。



Opening Festival (佐藤学長挨拶)

さて、そのような広まりをみせた今年の総合文化祭は、「Supernova」というテーマのもとで行われました。和訳をすると「超新星」と訳されます。超新星という星の輝きはすさまじく、一生を終えた後に起こす爆発は、はるか遠くの星からも観測できるほどの輝きを見せながら多大なエネルギーを放出します。私たちはこのテーマに、総合文化祭に関わっていただいた方々全員の楽しさや喜びなどといったエネルギーを爆発させたい、という想いを込めました。また、このエネルギーを弘前市をはじめ、青森県全体、さらには日本全国まで広げたい、という想いも込めました。

今年はこのテーマの通り、様々なエネルギーが広まっていく様子を見ることのできたのではないかと私は思います。今年初めての試みとして企画したステージイベントの一つである「大演奏会 in HIRODAI」は、通常屋内で行われる美しい演奏を屋外でも行ってほしい、という願いから開催され、近隣高校二校の吹奏楽部の方々をお招きし、弘前大学吹奏楽団の方々と共に、屋外ステージにて演奏をしていただきました。このイベントでは高校と大学、そして地域の方々が一堂



大演奏会 in HIRODAI (岩木高校)



Let's play the BINGO !



よさこい (焰舞陣)



☆ BEST パフォーマンス ☆



Rock Festa -2012



Final Festival

に集まり、弘前大学の交流の輪を広げることができたのではないかと私は感じます。

またその他にも、今年新しく本学学長に就任された佐藤学長に快く協力していただいたことにより、学長主演イベントや屋外出店における模擬店のNo.1を決定するM-1グランプリを行うことができました。そんな年々賑わいを増している総合文化祭のテーマが、一生の終わりに起こす爆発でよいのだろうか?と思った方もいるかもしれませんが、今年のテーマにはもう一つの意味が含まれています。超新星は、爆発した後に新しい星の誕生も促します。つまり、ただ一生を終えるだけではなく、次世代へと続く新しい道を残していくのです。私たちはここに、来年度以降も総合文化祭がさらなる発展を遂げ、より多くの方々に満足していただけるようなものを作り出してほしい、という願いも込めました。

今回総合文化祭を開催するにあたり、地域の方々、企業の方々、本学教職員の方々、出展団体の方々など、数え切れないほどの多くの方々にご協力いただきました。多くの方々の激励のお言葉のおかげで、私も学祭本部実行委員会は総合文化祭の開催・運営に向けて尽力することができました。本部員を代表してここに厚く御礼を申し上げます。あふれんばかりの感謝の気持ちや、楽しさ、喜びが爆発した今年の総合文化祭でしたが、皆様楽しんでいただけたでしょうか。来年度以降もより輝きを増し、さらなる発展を遂げることを願っております。



第8回弘前大学学生「言語力」大賞コンテスト

「言語力」とは、読む力・書く力・調べる力・伝える力を含めています。

弘前大学附属図書館は、学生の皆さんに「言語力」を養ってもらおうと、平成17年度より「言語力」大賞コンテストを実施しています。第8回コンテストの受賞作品から「文学作品部門」及び「テーマ部門」の大賞を掲載します。

文学作品部門

老境の鬼 大賞 人文学部2年 齊藤 拓

dento-dengara-shan-shan-shan
dagsk-denkata-shan-shan-shan

太鼓と手平鉦が私の鼓膜を殴りつける。さらに横笛の上ずった音が一本の芯になり、耳を蹂躪して突き抜けた。

街灯や露店のライトで、赤や緑に彩られた広い夜道。両端の歩道には人が群がり、真ん中には私と格好を同じくした鬼が八人、金色の扇を翻して舞っていた。

鬼には角がなかった。恐ろしい顔をしていながらも、鎖帷子に胸当てをつけて、袴とわらじをはく姿は鬼というよりも戦う人間であった。それらの横には囃子を奏しながら念仏を唱える人間がひかえている。

私は隣の集落の人間が踊るのを見ながら、次の次に回ってくる自分の出番を待っていた。顔の左半分には口を開けた青の鬼の面をつけているので、人々の喧騒やそここのスピーカーから流れるラジオの音が、左耳だけくぐもって聞こえる。

彼らの舞は若かった。高く上げられ、どんと地を踏みしめる足は、私の腹に響く太鼓の低音や念仏と相まって地鎮のまじないとなる。八人が輪になって、八艘飛びさながらに跳ねながらぐるりぐるりと回るさまには、腕、膝、足首の柔軟さがあふれ出ている。

「あれ、中学か高校のやつじゃ」隣で、白い鬼の面をつけた

長岡がある一人を見ながら話しかけてきた。長岡は額や口元のしわと目の下の深くまに影を作った男で、来年には五十になる。

それを聞くと、私は確かに右端で舞う彼の体が小さく細いことにやっと気がついた。

「んだってかァ。どこの子だってや」

「そづは知らね。岩崎なら、高校生だども踊るやつなどなんぼといるべ」

「S高校のやつなんだべな」

長岡は、んだな、と言ってまた舞を見始めた。

岩手・北上の夏祭りでは、封鎖した一般道をステージにして、伝統芸能である「鬼剣舞」の、集落ごとに分かれた各流派が一堂に会して観光客に舞を披露する。今の出番は岩崎と呼ばれる集落の流派で、鬼剣舞の始祖とされ最も活動的で広く知られている。

岩崎に生まれた人間は元祖としての気負いがあり、子供の時分で全員が鬼剣舞を教わる。また岩崎から程近いS高校には、岩崎の人間を講師として招いている鬼剣舞部というクラブも存在し、入部する学生も多い。

そうした若い人間を取り込む活動からか、踊っている岩崎の連中におそらく長岡のように天命を知った人間はいない。

「原体村も舞手も無くなってしまうな」私は長岡に言うでも無く、

ぽつりとこぼした。

don-don-don-iy-sharno-don
sennyar-hahh!

岩崎の連中の舞がいよいよ勇壮を極める。私は男たちの酒に焼けた掛け声の中に、ひときわ高い声を認めた。最前話したあの少年だ。ほかの男はこなれた動きで扇をハの字に回してはまた足踏みをした。一方、彼はゆらりと頭を動かす。馬のたてがみでできた頭の飾りがなびく姿はしなやかで艶かしいような印象で、大人はもとより、私たちに教わっていたような子供にも見受けられないものだった。

腰に下げた模造刀に手をやる。柄ががさがさとした感触なのは決して刀が古いものだからという理由だけではない。長岡だけでなく、私とてほうれい線を月光で浮かび上がらせているのだ。

囃子がゆっくりとした拍子になり、鬼たちが腕を組んで片膝をつくと、舞が締めに入る。

それまで腹や耳を揺さぶっていた太鼓と手平鉦が互いに息を合わせつつ、しめやかになっていった。横笛の響きがあちこちのイルミネーションに消え入って、鬼が頭を垂れる。そしてわっと拍手が起こった。

鬼たちがめいめい群衆に向かって軽く会釈をしたり、面を外して顔見知りと見える人間の蛮骨な歓声に答えたりしている。私は舞い終えてもなお、うずうずと身軽そ

うに引き上げてくる少年の顔を見てみたいと思った。するとそれを聞き入れたように彼は面をぱっと取った。私の近くで、彼であろう名前を叫ぶ友人らしき声があったから。

彼は卵型の顔に張り付くように生え揃った濃い眉毛と、ぱっちりとした目を強調する睫毛が目立つ、紅顔の少年だった。どうだった、と友人に話しかける声はやはり大人のものではない。不意に喉がいがらっぽくなり、咳払いをした。

「沼さん。どうだ、本番前さァなって」岩崎の連中の一人である藤井が私のもとに寄ってきた。

藤井とは同じ工業高校を卒業して、同じ会社に入った。二つ年下だが、いつからか私に敬語を用いなくなっていた。話しかける態度など、三十年の間にどうでもよくなってしまったのだ。

「何とも思わねえ。慣れるどころか、だれてしまったじゃ」私はそう言って、かかか、と喉で詰まった笑い声を漏らす。どこかで、露店の風船の割れる音が聞こえた。

「まったく、疲れるなや」首や肩の骨を鳴らす藤井の姿を見れば、ますます年下であることが何だろうかと思えてくる。

「あの若いやつを見てらったんだよ」

友人とタッチを交わしている少年を顎で指すと、藤井は後ろに首をひねってあいつか、と目をやった。

「あれは、^{にわもと}庭元の息子だ」藤井が、白い面の師匠格を意味する「庭元」と少年とを交互に指差した。庭元は、少年と同じく集まった顔馴染みの、労をねぎらうような言葉を受けている。

「今、工業の三年生で、春から他の県の学校さ行くんだづと。親父も一度一緒にやりたいつうのはあったと思うじゃ」

「だども、あいつより長くやってるやつもいるべ」

「まあな、^{ひいき}最^き願^きしてるかもしれねけども、われの頃みたく北^こ上^さに住んで、仕事するかは分からねえしよ。今のうちに息子に選択肢をやったんでねえか」

少年は友人たちと人だかりを抜けて露店の方へ歩いていった。彼は衣装を脱いだらさっそく祭を楽しみにいくのだろう。暑そうに面と頭の飾りと、その下の頭巾を取った彼の伸びかけの坊主頭が、人々の影の間から見えた。

話し込んでいた庭元が、その時ちょっと遠ざかる息子を^{いちべつ}一瞥した。そして、ビラリと行ってしまったじゃ、と話していた人間に笑って言った。私は庭元が大変そうに見えて、心持ちうらやましくなった。

次に披露いたしますのは…と、女性のアナウンスがやかましくこだまする。プログラムは進み、岩崎のものとは別の囃子が始まった。**dansk-dansk-sttekdén**

「あ、さっき言ってらったこと……」

突然、長岡が口を開く。「さっき」がいつのことか分かりかねてうろたえた。

『「原体剣舞連」だべ。原体村だの、舞手だの」諒解した私は、んだ、と^{うなず}頷いた。

宮沢賢治が、踊る子供たちの印象をうたった詩である。この詩という剣舞は鬼剣舞ではないが、月夜に舞う鬼が想像できて非常に好きな詩だった。だあだあ、だあだあ、だあすこ、だあだあ、と口ずさんでみれば、やはり耳を叩かれる囃子と相まって同化する。

「うちには、跡継ぎがいねえんだよな。もう教えられる人間も減ってきてきて」長岡は扇をあおいでため息をついた。その声は嘆くというよりは同意を求めるようだった。

私は長岡の言葉に対して、何も返せなかった。岩崎を含め、活発な流派には秘伝書が存在し、それを受け継いでいくことで存続を可能にしている。私の流派にはそれ

が存在せず、人が語り継いでいっしかないのだ。しかし、時代とともにこれを誰かに伝承していく機会は少なくなっている。

いや、正確には私の流派はもはや伝承が途絶えた扱いなのだ。

北上で、かつてそれぞれの流派の鬼剣舞を伝える学校は方々に存在した。しかし合併とともに、それまでの各学校の伝統が絶たれてしまうことが相次いだ。私が住む集落もその例に漏れず、十年ほど前に、有志が鬼剣舞を教えていた近隣の小学校が廃校になった。それにより、人々が正式に私たちの流派を教わるほぼ唯一の機会がなくなった。

「新しい学校に教えるつうても、今は市外から来る教師も多いべ。そいつらは、鬼剣舞がどういふものか、わからねよなあ。すぐには」と藤井。

その通りだった。流派を存続させる動きがあるにはある。一度、新設された小学校から鬼剣舞を子供らに教えてほしいという依頼を受けた。しかしそれは、踊ることのできる人間が多かったからこそ成しえた少人数指導ではなく、数十人を一遍に相手にしなければならぬものだった。私を入れてたった三人での協議の末、やむなく学校内で十人ほどの希望者を募らせる形をとった。その決断が果たして正しいものだったかは、今でも答えが出ない。

夜道の中央で、また別の流派の人間が、ガラリと光る刀を振りかざしながら見得を切る。岩崎の連中と比べれば、きれのない動きだった。面の下では顔中が汗で塩辛くなっているだろう。私はきつと、本番前のリハーサルを見ているのだ。

「そろそろ、沼さんの番だな。まんず、今は踊るしかねえべおん」

藤井が力いっぱい私の肩を掴む。

「剣舞の鬼は、この辺を守る仏の化身だから角がねえんだで。少な

Ⅲ 言語力大賞コンテスト

くとも沼さんは、守られたり救われねば嘘なんだァ」

路上の鬼たちはいつの間にか刀を置き、最後の腕組みの舞になっていた。すんなりと囃子が閉じられると、やはり鬼はがくりと頭を下げて終わる。私が予想したとおり、膝をついた鬼の肩は上下していた。

拍手の中、引き上げてさっさと面を取った男たちは夜風を貪って顔を拭いた。入れ替わりに年老いた三人の伴奏がヨチヨチ楽器を運

び入れて、やおら棧敷に腰を落ち着ける。

演目は「二人加護」。鬼となるのは、私と長岡の二人だけだ。これまでに何回加護を受けた勇者を演じてきたのだろうか。雄叫びを上げる顔を切り取った私の面と、口を真一文字に結んだ長岡の面。この阿吽の舞を、私はあと何回踊るのだろうか。

私は面をつけ、今までの舞台袖に何の名残惜しさもなく歩みだす。藤井に掴まれた肩が軽くなっ

たと思ひ込むようにつとめた。

私は、ただ私を守るのだ。「打つも果てるもひとつのいのち」宮沢賢治の詩の最後の一文を何となしに口に出した。

二つの穴からしか外を覗けない暗い面の中で蹲踞の体勢をとれば、すぐに伴奏が始まる。

街灯や露店のライトに淡く光っている扇をぱっと開いて、私は他でもない月下に跳ねた。

dagsk-ya! dagsk-ya!
dagsk-zuttsuno-dedden!

講評

本作を評価した委員の皆さんが一樣に感嘆したのは、岩手県の民俗芸能である「鬼剣舞」の描写でした。幻想的な祭りの音や色、感触、伝統芸能に従事する人々の気持ちの動きが巧みに描かれており、まるでドキュメンタリーを読むかのような錯覚に襲われたことでした。加えて伝統芸能を保存することの困難さもストーリーのなかに織り込み、祭り空間に読者を引き込むだけでなく、現代的な問題も考えさせるなど、作者の技量の確かさを感じさせる作品でした。

テーマ部門（災害復興）

語りもたらす復興

大賞 人文学部1年 藤田 雄大

「地震のあった日、私達は家に居たの。私は逃げようっていったのだけど、主人は家に残ると言っていて。だから私だけ逃げたんです。それで助けられて。」

突然語られた言葉は、場の空気を硬直させるのに十分だった。恐らくその場にいた全員がこう思ったことだろう。

ご主人はどうなったのか。

整った白い髪。派手ではないが上品な服装。落ち着いた声。穏やかな顔。淑女という言葉がよく似合う老女であった。押し花教室の最中に、前触れもなく始まった老女の語りは、あまりにも重く、あまりにも衝撃的であった。「皆でふるさとを合唱しましょう」

歌が好きだと話す老女は、押し花教室の終わりにそう提案した。兎追いしかの山、小鮒釣りしかの

川。それは誰もが知っている曲であった。しかし、私はこれまで、こんなにも悲しいふるさとを聴いたことがなかったのである。

弘前大学人文学部ボランティアセンターに参加して一年以上が過ぎた。弘前市・大学・市民が共同し、被災地でボランティア活動を行っているという事実を、地元FMラジオのニュースを通じて知った。何かせずにはいられない。しかし、何も出来ない。もどかしさを抱え、鬱々と日々を過ごしていた私にとって、弘前大学人文学部ボランティアセンターの存在は救いの神に思えた。ニュースを聞いたその日に参加を申し込み、初めて岩手県九戸郡野田村に行ったのは昨年六月四日のことである。

現地で見えた光景は、今でもはっきり覚えている。方々に山積みされた瓦礫。粉塵マスクを付けな

ければ呼吸ができない程の砂埃。堤防が決壊した海岸線。いずれも強烈に記憶に刻まれることとなった。その中でも一番衝撃的だったのが、地震のあった時間で止まった時計である。まるで一九九五年に発生した阪神大震災を彷彿させるかのようなのであった。当時のニュースでは、地震のあった五時四十六分で止まった時計が連日のように報道されていた。東日本大震災は二時四十六分に発生し、奇しくも阪神大震災と同じように、時計の長針は四十六分を刺したまま止まってしまったのである。これは偶然なのか。そう思ったのは私だけではないことだろう。

ボランティアの活動は、瓦礫の除去作業が中心であった。作業を行ったのは、野田村役場近くの一軒家である。正確には一軒家があった場所と言わなければならない

い。なぜなら、そこに残されていたのは、家を支えていたコンクリートの土台のみだったからである。敷地内には木材や大量のガラスの破片、海水をかぶり異臭を放つ泥が散乱していた。それらを手作業で土嚢袋に詰めていく。

六月は気温が徐々に上がり始める時期である。吹き出る汗と粉塵にまみれて行う作業は過酷そのものであった。一時間に一回は休憩を取らなければ体力が持たない。それにも関わらず、手を止めようとする人はなかなか現れない。そんな状況であった。一刻も早くこの瓦礫を片付けてしまいたい。ボランティアに参加している全員が同じ気持ちであったに違いない。瓦礫の中には写真や指輪、財布と言った品々が多数見受けられた。一つ一つ丁寧に泥を払い、瓦礫とは別に保存していく。作業終了後、まとめて役場へ届けたのだが、無事持ち主の元へ帰るのだろうか、という思いが消えることはなかったのである。

七月に入り、暑さも本番を迎える頃、野田村では蟻が大発生していた。瓦礫を片付けていると、泥の中に大量の蛆が湧いていることもしばしばあった。置き去りにされた冷蔵庫の扉を開けたら、中から大量の蟻が飛び出してきて、という話も聞いた。もしもその場に居合わせたら卒倒していたに違いない。そんなことがありながらも、回を重ねる度に瓦礫の山は大きくなっていったのである。ずいぶん作業が進んだということを実感すると同時に、これらの瓦礫には野田村の人々の思い出が詰まっていると思うと、胸が強く締め付けられたのである。

ボランティア活動に変化が見られたのは八月下旬のことであった。瓦礫の除去作業は目処が立ったため、九月からボランティアの受け入れは行わないとの発表がなされたのである。その発表は喜ぶべきことであった。道路を覆って

いた瓦礫は無くなり、防塵マスク無しで呼吸をすることも容易になった。住民の仮設住宅への引っ越しも完了し、住宅を新築する箇所も見受けられるようになった。ボランティアの受け入れが終了するという事は、それだけ被災地の復興が進んだということを示していたのである。外部から野田村へやって来るボランティアが支援を続けることは、被災地に住む人が、自らの力で復興に向かおうとする態度に水を差すのではないかと、との意見も聞かれた。事実、ボランティアに対する作業依頼は確実に減少していったのである。

しかし一方で、ボランティア活動を終了するのは時期尚早であるとの指摘もあった。依頼が少なくなったからと言っても完全に無くなった訳ではない。活動を終了してしまえば、せっかく育まれた野田村の人々の信頼を裏切ることになるのではないかと。規模は以前と比べて小さくなるかもしれないが、これまで通り継続して活動したい。物理的支援だけでなく、被災者の心に寄り添うような活動をしたい。こうした声も数多く聞かれたのである。災害支援から文化交流活動への移行。それが本格化したのは震災から半年経過した九月のことである。

文化交流活動は手探り状態であったと言える。どうすることが被災者の心に寄り添う、ケアを行うと言うことになるのか。明確な定義は出来なかったように思う。誰も経験したことのない大災害なのだから、それも仕方のないことであろう。登山、子供の遊び相手、祭りの手伝い、押し花教室と言った企画がなされ、概ね好評を博していた。しかし、イベントを企画したにも関わらず、野田村の人がなかなか集まってくれないことに対する不満も、ボランティアの中から聞かれるようになったのである。加えて、特設テーマ科目として開講された「東日本大震災

復興論」の学生参加者が大幅に増えたことにより、これまで継続して参加していた市民が、定員の関係で参加しにくくなるという事態も発生したのである。勿論、全ての学生がそうだったとは言わないが、単位目当ての学生の参加も多かったように思う。そろそろ潮時かもしれない。私の中ではそんな想いから大きくなっていったのである。

転機が訪れたのは四月のこと。久しぶりに野田村の様子を見たいとの想いから参加を決め、バスに揺られ約三時間半。窓から見える景色は見慣れたものとは少し違っていった。広場に積み上げられた瓦礫の山が無くなっていったのである。記録的な大雪を記録した冬の間も、復興へ向けた歩みは止まることなかったのである。胸が高鳴るのを感じた。自分にもまだ出来ることがあるのではなからうかと。

そう思い始めていた矢先、私は冒頭の老女と出会うことになる。震災から一年以上経過したにも関わらず、胸の内を誰にも打ち明けられずに過ごしてきた人がいる。その事実を目の当たりにすることで、私の心に変化が生じることとなる。確かに語られた言葉は衝撃的であった。しかし、今振り返ればこうした語りが得られたことは大きな意義を持つものと確信している。人間の心理において、過去に負った辛い出来事を語る時には、目の前にいる相手がきちんと受け止めてくれるかどうか、無意識に判断するものとされている。老女があの日出来事を語り始めたのは、継続して野田村で活動してきたボランティアに対する信頼があつてのことなのだろう。震災の記憶を打ち明けることは、本人にとっても辛い記憶を呼び覚ます行為に違いない。しかし、過去に負った心理的外傷を克服するには、自分語りは不可欠なプロセスなのである。

Ⅲ 言語力大賞コンテスト

自分語りの機会を作りたい。

瓦礫は片付ければ土地は綺麗になる。しかし、心はそうはいかないのである。心とは目に見えず、手で触れることも出来ないものである。被災者が心に負った傷を視覚化し、物理的に取り除くことが出来たら、どれほど楽か分からない。結局の所、心の傷は被災者が、被災者自身の力で乗り越えなければならないのである。私達に出来るのは、交流を途絶えさせることなく彼らの心に寄り添い続け、語られる言葉にじっと耳を傾けることだけなのである。目に見えて成果が上がるものではないし、時間もかかる。瓦礫除去に比べればはるかに効率が悪くと言わざるを得ない。しかし、被災者が過去の辛い記憶を乗り越えるためには、自分語りを語る相手がいなければならないのである。そして

私は、いつか始まる自分語りを待ち続けよう、今やめる訳にはいかない、と思うようになったのである。

復興という言葉には、元の状態に戻すという意味が含まれる。しかし実際の所、どんなに月日が流れても、震災で受けた傷は生涯消えることはないのである。よって私は復興という言葉に新たな定義を加えたい。いつか震災の記憶が表出し、言葉や感情となって表出した時に、それらを受け止めるための関係作りである。文化交流活動は双方向の働きかけがあって初めて成立するものであり、最適であるように考える。こちらから会話や文化活動といった働きかけがなされることで、被災者からも何らかのリアクションが返ってくる。感謝の言葉が聞かれることもあれば、最愛の人を失った悲しみ

が表出するかもしれない。どんな語りが得られても目を背けず、寄り添い続けること。物的支援が重要なのは言うまでもない。それ以上に、これからは自分語りの機会を設けるための、精神的支援の充実が求められている。そう感じるのである。

「今日はどうもありがとうございます。またいつか、一緒に歌いましょうね。」

帰り際、何度もお礼を言う老女の姿が印象的であった。今度ふるさとを歌う時には、切なくも懐かしさを感じるふるさが響いて欲しいと、心から願う。そして、被災者の悲しみが一日でも早く癒され、穏やかな生活に戻る日が来るまで、私も非力ながら活動を続けていこうと思うのである。

講評

大震災後、多くの弘大生がボランティアとして被災地に赴きましたが、その心情、葛藤等を詳しく知る機会は多くありません。この作品は、震災復興の一助になればと手探りで活動を模索する中で、被災者の様々な思いに触れながら、復興について自らの思考を深めていく様子がよく描かれていると感じました。それがこちらに伝わったのは、作者が自身の心情等と向き合い、読者を意識して言葉を丁寧に選んだからではないでしょうか。

第8回弘前大学学生「言語力」大賞コンテスト選考結果

文学作品部門

- 大賞 齊藤 拓(人文2年)
「老境の鬼」
- 佳作 柳谷 志穂(人文1年)
「あいことば」
- 佳作 清水 卓馬(人文4年)
「食前対話」
- 佳作 佐藤 里穂(人文3年)
「光芒」
- 佳作 新屋 祐莉(教育2年)
「ロボットは廃団地で泣かない」

テーマ部門(災害復興)

- 大賞 藤田 雄大(人文1年)
「語りがもたらす復興」
- 優秀賞 土田 千愛(人文4年)
「仮設住宅から」
- 佳作 名取 史晃(農生3年)
「復興と新興」
- 佳作 川村 啓嘉(人文4年)
「個人の防災意識と復興」



文学部文化財論コース

文化財論コースは、人文学部の教育課程再編によるコース制の導入により、平成17年に誕生しました。文化財論コースには7つのゼミがあり、学部学生79名と地域社会研究科の大学院生3名が在籍しています。ゼミは宗教学ゼミ（諸岡道比古教授）、日本美術史ゼミ（須藤弘敏教授）、文化財論ゼミ（関根達人教授）、民俗学ゼミ（山田巖子教授）、西洋考古学ゼミ（宮坂 朋教授）、西洋芸術史ゼミ（足達 薫教授）、日本考古学ゼミ（上條信彦准教授）があります。

コースでは人間の生み出した文化について文化財を通して学びます。一見、ミステリアスな遺跡や祭礼、きれいな絵や彫刻を対象にしますので、ロマンを感じる学問ですが、モノに秘められている文化を理解すると、何も語らないモノ（有形・無形問わず）ですから、我々がモノに語りかけなくてはなりません。学問の現場は、ひたすらモノとことばの間で格闘しています。このモノに語りかける技術を学ぶことができるのが、本コースの醍醐味なのです。特に実際の文化財に直接触れることで、五感を通して、文化の多様性とその魅力を学びます。また、文化財を通してそれを生み出した時代や社会を研究します。文化財の価値を知り、文化財を見出し、保護・育成する能力を養います。コースの特色は、実習調査や研修旅行を通じて、学生一人一人が、文化財に直接触れ、調査や研究ができる点です。各ゼミには、実習室があり、埋蔵品や、技術・伝承・儀礼に関するさまざまな道具、宗教現象に関する書籍、絵画や彫刻といった具体的なものに触れ、対象に即した調査方法や研究方法を学びます。特に、聞き取り、測量、実測、撮影、保存処理など自然科学的分析を含めた多彩な調査法は、文理にとらわれない総合学問としての文化財のあり方を学ぶことができます。

学部学生は人間文化課程2年生の時に各実習を

受講し、3年次にゼミナールを選択します。各ゼミは、ひとつのチームです。研修や発掘などのフィールド調査を成功させるためには、チームワークが最も重要です。4月には、花見（新入生歓迎会）が開催されるゼミもあり、先輩後輩と交流します。夏～秋には、フィールド調査。OBや国内外の専門家などが加わり、賑やかになります。4年生や院生のなかには自らフィールドを開拓し、国内外へ調査しに出かけます。秋には数多くの研究会・学会が開かれます。調査の成果をここで発表します。この頃には多くの実習室には夜でも明かりが灯り、冬を感じながら卒業研究を仕上げていきます。

コースならではの活動もあります。今年度から弘前市鬼神社の総合調査として、各ゼミの先生・学生が多角的な視点から調査をしています。また昨年度には西洋考古学ゼミを中心にイタリア・レバノン・チュニジア等から研究者を招き国際講演会「ローマ時代のフェニキアとカルタゴ」と「呪いの鉛板ミニ展示」を開催しました。モノを背景に国際的なつながりを感じられるのもコースの特色です。

ここでは個性的なゼミの日常と研究活動について紹介します。

宗教学ゼミナール（諸岡道比古教授）

ドイツ観念論におけるカントとシェリングを中心に、「哲学における悪の問題」について研究しています。また、理論を応用して、日本列島における祭礼、儀式などの宗教について調査研究も行っています。例えば、青森県佐井村（2000年）や夏泊半島（2003年）で学生とともに実地で調査しました。「私のゼミに来れば、ドイツ語ができなくてもドイツ語ができるようになる」というのが先生のモットーです。

IV 研究室紹介

日本美術史ゼミナール（須藤弘敏教授）

日本の造形について社会や文化との関わりの中で理解することを目的に、3年生は美術史・建築史の基本テキストである漢文史料を徹底的に読み込む訓練を行い、やがて、各自がひとりひとりテーマを選んで作品や作家の研究のファーストステップを行います。そのほか、適宜博物館や寺院で絵画や彫刻の実地見学、調査の手伝いなどがあります。卒業研究のテーマは、学生の自主的な選択を尊重して、高松塚古墳壁画から現代の少女マンガまで多様なテーマに取り組んでもらっています。3年・4年ともに奈良京都を巡る研修旅行に必ず参加してもらいます。



美術館での特別観覧

文化財論ゼミナール（関根達人教授）

有形文化財の調査・研究・保護のあり方について学びます。共同で行う野外調査や、自分たちが集めてきた資料・データの分析から過去の歴史を明らかにしていく楽しさが売ります。最近では、北海道北斗市矢不來館跡（平成22・23年度）の発



鬼神社奉納品の調査風景

掘調査を通して、和人の北海道島進出や和人とアイヌと関係についての研究、北海道函館市・江差町の江戸時代の墓石調査（平成22・24年度）を通して、和人の北海道島進出や江戸時代の社会と家族のあり方の研究をしています。学



弘前市大沢地区での民俗調査

生は、資料からデータを抽出する方法や、データの分析、データの解釈について、実際に野外調査で得られたデータを使って調査報告書を作成するなかで実践的に学びます。

研究成果は、これまで8冊の調査報告書を刊行し、成果をもとに日本考古学協会などの雑誌に論文が掲載された例もあります。

民俗学ゼミナール（山田巖子教授）

民俗学では、生活のあらゆる事象が研究の対象になります。ゼミナールでは民俗学の方法を学び、実習と連動してフィールドワークの成果を対象化してゆく作業をします。この作業を通して問題を深めてゆく能力を養います。これまで調査報告書を6冊刊行しました。その時々フィールドにあわせて、「オシラ神の共時的動態把握（青森県夏泊半島）」「ベッコウと東北の神社祭祀（岩手県八幡平市安代地区）」「凶作への対応と日常の食慣行（岩手県八幡平市安代地区）」「家をめぐる慣行の変遷（岩手県八幡平市安代地区）」「奉公人慣行の近現代史（津軽地方）」「授かる神々の信仰基盤（青森県弘前市大沢）」「修験の末裔と近代史（青森県三戸郡新郷村）」などがテーマになりました。成果の一部は「聖地と民俗—弘前市大沢—」として弘前大学資料館に展示中です。また、いくつかの卒業論文は『青森県の民



獅子舞の門付けを調べる

俗』『東北民俗』などの研究誌に活字として発表されていますので、読むことができます。

人と関わる貴重な体験の機会が多いこともゼミナールの魅力の一つです。フィールドワーク後、話者に礼状を書くと、礼状に返事が返ってきて、そのまま文通関係が続き、卒業しても実習や卒論でお世話になった方と文通を続ける卒業生もいました。また「泊まりに來い」と言われて神社のオコモリにつきあい、祭祀の手伝いをした学生もいます。

西洋考古学ゼミナール（宮坂 朋教授）

古代から中世の地中海の美術作品や建築、都市計画、碑文、地中海交易などについて研究しています。研究対象は多様でも、意外に共通の話題も多く、多角的な視点で作品を見る目を養うことができます。たとえば近年は、エジプトの水辺の風景画、ローマの庭園図、ポンペイのニუნファエウム、パンテオン、シャルトル大聖堂ステンドグラス、ビザンティンのイコンと幅広いテーマです。実際、モノに惹かれ、現地へ出かけていく学生の姿もあります。

芸術史ゼミナール（足達 薫教授）

美術、とくに西洋の美術は、世界、人間、自然を表現対象としてきました。人間はその都度、自分自身と世界と自然をめぐって考察しながら、建築や絵、彫刻にその世界観を表してきました。そうした美術作品がなぜ、どのような契機で制作され、また鑑賞されてきたかを考察することで、文化財を研究する方法を指導していきます。美術史実習（2年次）で東京地方への研修旅行を行います（今年で13回目）。

日本考古学ゼミナール（上條信彦准教授）

先史考古学に関する思考を通じて、実地における観察眼・調査技術とともに分析能力・プレゼン能力を養います。具体的には土器や石器の付着物や痕跡観察を通じて、道具の機能・用途の復元を行い、それによって、食料加工を中心とする人類の技術開発の歴史を解明することがテーマです。

外ヶ浜町今津遺跡（2004年）、三戸町杉沢遺跡（2007年）、むつ市不備無遺跡（2009年）、秋田県五城目町中山遺跡（2012年）を発掘調査し



2012年 秋田県中山遺跡での発掘調査



現地説明会には200名余の見学者が訪れました。

ています。こうした研究の一端は、日本考古学協会、日本文化財科学会（2013年本学開催予定）、日本植生史学会（2011年本学開催）、SEAA（東アジア考古学会議）といった全国、世界規模の学会で発表されています。詳細は本ゼミHP（<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kamijo/>）にて。

ゼミを巣立った学生の進路も、研究テーマが多彩であるのと同様、様々です。学んだ技術を生かして、博物館学芸員や自治体の文化財専門職（教育委員会）なるOBもいれば、さらに研鑽を積んで大学の教員になる人もいます。さらにモノを観察する視点は、世界共通ですし、現在にも応用できます。タイやヨーロッパ各国に留学して現地で活躍するOB、警察の鑑識に配属されたOBもいます。文化財は必ずしも貴重なものばかりではなく、ヒトの日常についてモノを通じて学ぶ学問です。したがって研究をするうちに「自分をとりまく社会とは、」をいう問いにもつながっていきます。多彩な研究環境を持った本コースで学んだことが、将来生かされることを期待しています。



弘前大学からの海外留学

人文学部 人間文化課程 江利山 結美

大学二年生が終わってから弘前大学からの交換留学生としてニュージーランドのオークランドに一年滞在の予定で現在8ヶ月目の滞在です。今は英語が第一言語ではない人のために開かれた授業を受けていて、中国、韓国、サモア、ソマリア、エジプト、アフガニスタン、イラク、トルコなど日本に居たときには会う機会のなかった国出身の人達と机を並べて英語漬けの毎日を過ごしています。彼らは非英語圏出身であるのにも関わらず、とても流暢な英語を話すので、彼らは友達でありながらも先生のような存在です。

弘前大学からの交換留学を決めた理由はいくつかありますが、そのなかでも一番大きかったのは国際交流に興味があったということです。大学で入っているサークルも弘前大学に来ている留学生もたくさん所属しているもので、日本にいた時はそこが私にとっては国際交流の場でした。旅行をすることや外国の文化にも興味があるので、英語を学ぶことで自分の交流の場



が広がればいいなと思ったことや、自分を助けてくれるものがない新しい場所での生活にも挑戦してみたいという気持ちもあり留学を決めました。留学の選択肢は大学からの交換留学以外にもいくつかありましたが、奨学金や授業料の免除など費用を最小限に抑えられることや、学校からのサポートが交換留学選択の理由です。

オークランドはニュージーランド最大の都市で、よく「人種のるつぼ」と言われます。その名のとおり街を歩いてわかることは、ニュージーランドの先住民であるマオリの人々や植民地にしていた歴史を持つイギリス系移民の子孫の人たちだけではなく中国や韓国、日本、タイ、台湾などのアジア系やインド系、中東やヨーロッパ、アフリカからの移民も多くいてとても興味深い街です。その人種の多さからか、街には様々な国のお国料理が食べられるレストランがあり、今ではその多文化さというのもオークランドの魅力の一つであると思います。オークラン



ドを離れて田舎の方に足を運んでみると、そこにはもはや忙しい街の賑やかさではなく、高いビル一つないのどかな農場が広がっていて空はとても青く広く美しい自然に簡単に触れることができます。正直なところ、日本にいたときは青森が自然に囲まれているのにも関わらずあまりその偉大さというものを深く考えたことはありませんでした。しかしながら、こちらに来てからはその美しさや壮大さにすっかり虜になってしまったようです。こちらの人は動物を大切にすることが多く、そのためベジタリアンに会う機会がよくあります。実際フラットメイトのなかにも何人かベジタリアンがいて、彼らと食事を共にしているとベジタリアンになるとはいかないまでも、あまり肉や魚、卵などの動物性食品を食べなくなりました。このことも日本にいた時にはあまり考えなかったことですし、こちらに来なかつたら関心さえも待たずに過ごしていただろうと思います。留学の意義としてよく言われることのうちに、語学の取得だけではなくその土地の文化にふれることというのがあるかと思いますが、これは前述したようなことを当に指しているのだとこちらに来て感じています。日本にいた時の自分とこちらに来てからの自分を比べても、ものの考え方などにかなり変化が見られますし、それは日本に帰ってからも自分の世界を広げる役に立ってくれるのではないかと思います。

外国人の方が思う日本ということについて感じたことがあるのでここで紹介します。すべてニュージーランドでの話になりますが、親日家の

ひとが多いのを感じます。それはニュージーランド人に限ったことではなく、ほかの国の方も日本についてとても前向きな印象を持ってきているように思います。たとえば、レストランやコンビニエンスストアに行ったとき、店員さんによく「Are you Japanese?」と聞かれます。たいてい彼らは笑顔でたどたどしくも「konnitiwa」や「arigato」などと返してくれます。日本人は誰も優しく好きだと言ってくれるひとがとても多いことに驚いたほどです。

留学をしていて思うことは、人との出会いが多くそのたびごとにいろいろなことを吸収できる、そのことがニュージーランドに来て一番の収穫であるということです。やはり人との出会いからは学校での勉強では学べないことを教えてくれます。ニュージーランドには、前述したとおり本当にいろいろな国の人がいるのでニュージーランドの文化のみならずアジアや中東など日本にいたら知ることが難しかったであろう文化にも触れることができるのが大きな魅力であると思います。

こちらに来て8ヶ月ほど経ちました。今後の予定としては、オークランドを離れてビザの期限である3月までニュージーランド各地を周る予定でいます。限られた時間での留学ですが、3月の帰る頃にはとても価値のある時間であったと自信を持って日本に帰ることができそうです。最後にこの留学の手続きを斡旋してくれた留学生課の方々や支援してくれたすべての方々、そして家族に感謝申し上げます。



VI 新任教員紹介



教育学部 数学教育講座 准教授 **山本 稔**

9月1日付けで着任致しました。専門はトポロジーという幾何学の一分野で、点同士の繋がり方に着目して図形を分類する数学です。柔らかい幾何学と呼ばれていたりもします。高校までの幾何学と随分違うなと感じませんか。不思議だなと感じた方、よくわからないけど何か面白そうと感じた方、是非研究室へいらしてみてください。お待ちしております。



大学院医学研究科 泌尿器科学講座 講師 **橋本 安弘**

このたび泌尿器科学講座に赴任することになりました橋本安弘と申します。私は泌尿器科医になって約18年たちますが大学に戻るの今回で5回目となります。平成22年からこれまで鷹揚郷弘前病院で主に慢性腎不全の患者様の血液透析、腹膜透析の治療に携わってまいりました。これまでの経験を活かし患者様の診療や学生のみなさんの指導に全力を尽くしたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。



大学院理工学研究科 准教授 **藤崎 和弘**

平成24年8月16日付けで着任いたしました、藤崎和弘と申します。専門は機械工学を基盤とした医用工学であり、骨や歯といった硬い組織の構造特性に関する研究を行ってきました。最近は医学、生物学、情報工学など多分野の方々に支えられ、生体材料や精密加工の研究も進めています。ヒトに役立つ技術開発を目標に新しいテーマを模索していきたいと思っておりますので、ご協力いただけますと幸いです。よろしくお願いいたします。

VII けいじばん

平成24年度東北地区大学体育大会を開催



平成24年度東北地区大学体育大会は、東北地区大学体育連盟加盟の47大学が参加して、5月20日（日）～11月4日（日）の日程で開催されました。

弘前大学では、水泳（6月16日・17日）が平川市屋内プールゆうえい館で15大学348名、バドミントン（6月30日～7月1日）が青森県武道館で22大学219名、準硬式野球（7月6日～8日）が弘前市運動公園野球場及び岩木山総合公園野球場で13大学306名が参加して開催されました。どちらの競技とも、各競技場で熱戦が繰り広げられました。

弘前大学ボランティアセンターを開設

10月1日（月）、大学としての地域貢献、社会貢献の立場から、大学が組織的に行う地域への支援の一環として、自治体や各種NPOと連携し、ボランティア活動の推進及びその支援を図るため、弘前大学ボランティアセンターを開設しました。東日本大震災直後、人文学部においてボランティアセンターが立ち上がり、岩手県野田村で活動してきた実績があります。これを発展的に全学組織として活動するための組織としました。



大学会館2階に設けられた弘前大学ボランティアセンター前で、佐藤学長と大河原社会連携担当理事による「弘前大学ボランティアセンター」の看板が上掲され、その後大河原理事から挨拶がありました。

ボランティアセンター内では、これまで人文学部ボランティアセンターが岩手県野田村で活動してきた様子がパネル展示され、関係者による内覧会が行われました。

「学長と新生保護者との懇談会」を開催

本学では、新生保護者への情報提供、連携体制の充実にを図ることを目的として、毎年「学長と新生保護者との懇談会」を開催しています。

平成24年度は、10月6日（土）に札幌へ、10月14日（日）には八戸の会場へ出向き、弘前大学全体の特徴や「イングリッシュラウンジ」・「TOEIC受験料支援」等の就学支援制度、「岩谷元彰育英基金」等の経済支援制度、教員の「オフィスアワー」や「何でも相談窓口」などの相談体制、就職支援センター開設時からの本学の就職状況など多岐にわたる説明をし、2会場で合計55名の保護者の出席がありました。

質疑応答では、「初めて一人暮らしをさせたが、不安を感じた際に学生が相談する窓口について、始めはわからなかった」、「就職支援について4年次後期になった際も手厚い支援が欲しい」などの質問・要望があり、活発な意見交換が行われました。

この懇談会の実施により、新生保護者の方々の本学に対する理解が深められるとともに、学外者からの視点で見た弘前大学への意見・要望等を伺うことができ、今後の管理・運営の一助となりました。



Ⅶ けいじぼん

旧制弘前高等学校外国人教師館が弘前市の 景観重要建造物の指定を受けました



(交付式等の様子は弘前市提供)

10月16日（火）、弘前市で初めてとなる景観重要建造物の指定書の交付があり、本学が所有する「旧制弘前高等学校外国人教師館」も指定されました。

弘前市役所で行われた指定書の交付式には佐藤学長が出席し、葛西憲之弘前市長から指定書が交付されました。



Ⅷ 編集後記

第12回弘前大学総合文化祭が開催された。全学イベント、学術文化祭イベント、学部祭等々、内容は豊富で、息抜きの場があり、知的好奇心を高める場もある。年々、質は向上していると感じているが、地域と一体化するイベントでありたいと念じている。

弘前大学資料館が10月26日にオープンした。本稿冒頭で長谷川成一館長が詳細に説明をしているが、弘前大学の歴史、諸施設を把握するには最適な内容である。学外からの来客の際に重宝であり、新入生が訪問すれば自分の大学の持ち味が要領よく理解できる。基礎ゼミナールで活用したいものである。(Y)

▶▶▶ 2012年
弘大生の病気・事故等による
給付補償金は

3,032万円でした。

2012年は352件、弘前大学生が病気や事故、盗難などのアクシデントに見舞われ、加入している共済あるいは保険から補償されています。

その内容を、大学生協の学生総合共済(以下生協共済)と学生教育研究災害傷害保険(以下学研災)の給付実績をもとにまとめました。

※学研災は生協が大学より業務委託を受けて事務を代行しています

【2011年11月～2012年10月の給付件数と給付金額】

項目	生協共済		学研災		合計	
	給付件数	給付金額	給付件数	給付金額	給付件数	給付金額
病気入院・手術	100件	978万円	0件	0万円	100件	978万円
事故入院・手術	49件	371万円	3件	18万円	52件	389万円
事故通院・固定具	162件	463万円	0件	0万円	162件	463万円
後遺障害	3件	104万	1件	450万	4件	554万円
本人死亡	2件	300万円	0件	0万円	2件	300万円
盗難・借家人等賠償等	17件	198万円	0件	0万円	17件	198万円
扶養者死亡・見舞金	15件	150万円	0件	0万円	15件	150万円
合計	348件	2,564万円	4件	468万	352件	3,032万円

特徴①

日常生活では、自転車運転中の事故が多くなっています。

通学中の車との接触事故が毎年報告されています。通いなれている道でも、あらゆる状況を想定し、注意して走行することが大切です。

特徴②

病気では消化器系、呼吸器系の給付が多くなっています。

今年は短期の入院の給付が多かったのが特徴です。特に猛暑での熱中症や、食べ物による腸炎、食中毒などの給付がありました。

特徴③

後遺障害が残る大きなけがの報告がありました。

例年ほとんどないのですが、今年は後遺障害が残るような大きな事故の報告が複数ありました。

Q 入院費用はどのくらいかかる？

たとえば大学生が病気で入院したら、どのくらいの入院費用が必要になると思いますか？

- 平均入院日数 17.5日
- 治療費用の平均 143,874円
- 雑費(交通費等) 32,072円

治療にかかった費用と雑費の費用合計を、入院日数で割ると1日あたりの入院費用は約1万円となっています。

生協共済は、2009年に保障制度が改善され、入院1日あたりの保障日額が1万円と、大学生の実態により合った保障内容となりました。

●給付の申請手続きは生協店舗で簡単にできます。

(文京地区) SHAREA たび Shop tel0172-37-6480

(本町地区) 生協医学店 FERIO tel0172-35-3275

お気軽にお申し出、お問い合わせ下さい。

●食堂入口に設置されている給付ボードで、毎月の特徴的な病気・事故や給付内容を掲示し、予防の呼びかけもしています。

給付ボードは、生協の学生委員会が中心になって作成しています。毎月、給付の中身を吟味して、学生に知ってほしい情報を掲載しています。ぜひご覧ください。



弘前大学生生活協同組合



Earth Vision (コラボ弘大 1F)



医学部コミュニケーションセンター



総合文化祭の準備風景

弘前大学 VOL.176

学園だより

2012年12月発行

学園だよりに関するご意見がございましたら、
下記のアドレスまでお寄せ願います。

e-mail: jm3113@cc.hirosaki-u.ac.jp

弘前大学学務部学生課



HIROSAKI
UNIVERSITY

国立大学法人弘前大学「学園だより」編集委員会

- 委員長 今井 正浩 (教育委員会)
委員 保田 宗良 (人文学部)
出 佳奈子 (教育学部)
松谷 秀哉 (医学研究科)
西村 美八 (保健学研究科)
宮本 量 (理工学研究科)
大町 鉄雄 (農学生命科学部)
澤田 祐子 (学生課)
粕谷 常好 (学生課)

印刷：青森コロニー印刷